中部学院大学・中部学院短期大学部　研究紀要第12号(2011)　96－102

研究ノート

イエス物語を再話する ～内戦下スリランカにおいて「受難物語」を再読する～

Re-telling the Passion Story of Jesus in the Midst of the Ethnic Conflict in Sri Lanka

志　村　　真
Makoto HIDAKA-SHIMURA

抄録：まず、26年にわたる内戦を経験したスリランカで、内戦と貧困からの解放と宗教間対話とを統合する「共生神学および共生神実践」を提唱した、タミル人神学者レックス・ジョセフのタミル語主著『Theivam Puluthiyil（塵の中の神）』の中から、イエスの受難物語（十字架物語）の再話「塵の中の神」を訳出する。

その上で、この再話におけるイエスの発話が「十字架上の7つの言葉」のパラフレーズであることを示す。次に、受難物語に予型論的に反映された詩編22編が再話ではどのように用いられたかを検討し、詩編22：16の「あなたはわたしを塵と死の中に打ち捨てられる」が、ジョセフにおいては刑死したイエスの実相であることの状況神学的な意義を粗述する。

キーワード：イエス、受難物語、スリランカ、内戦

はじめに

スリランカは過去26年にわたる内戦（1983年7月～2009年5月）を経験し、人的資源と社会基盤を大きく損なうと共に、諸民族･諸宗教間に根深い不信感を残した。本ノートは、内戦とその帰結である貧困からの解放と、不信を払拭しようとする宗教間対話とを統合する「共生神学および共生神実践」を提唱した、レックス・M. P. ジョセフ（1944年～2007年）の神学思想と活動を、記述的に研究するプロジェクトの部分を形成するものである。

1948年の独立以降、スリランカのキリスト教会は、植民地支配の受益者、西欧キリスト教の出先機関であることから決別し、真の独立教会としての再生を旨としてきた。その際の課題は二つである。第一は厳然と横たわる貧困、とりわけ旧内戦地域とインド洋大津波被災地に顕著な貧しさをどのように担うかである。第二は、かつて文化的に西欧化することがキリスト教宣教のあり方と考えられていたことを捉え直し、スリランカ文化に根ざしたキリスト教をどのように創造するかである。実際、スリランカの現代キリスト教は、カトリック、プロテスタントを問わず、「『貧困と暴力からの解放』と『諸宗教との対話』の神学・神実践（theology / theopraxis）」という枠組みを提示してきた。

これら二課題を統合的にとらえ、実践活動を踏まえつつ新しい神学を提唱した一人が、レックス・ジョセフである。彼は、仏教との対話と社会開発実践において先駆者な役割を果たしてきたアロイシウス・ピエリスやティッサ・バラスリヤらの問題意識を受け継ぎ、少数民族タミル人として、同時代の内戦状況を停戦から和解へと導くために宗教が果たすべき役割を積極的に捉え、主要４宗教間の全方向的対話を提唱して、地方都市プッセラワでそれを実践した。すなわち、これまではキリスト教と仏教、キリスト教とヒンドゥー教といった一対一の形式で行われてきた宗教間対話を、全宗教が「宗教際フォーラム」に結集することで、全方向的・共生的なものへと発展させようとしたのである。(注1)

本ノートにおいては、ジョセフのタミル語主著『Theivam Puluthiyil（塵の中の神）』（1996年）(注2)に収められている、イエス物語の再話13篇と現代的詩編８篇の中から、重要と思われる再話１篇を取り上げる。すなわち、書名ともなった「塵の中の神」と題されたイエスの受難物語（十字架刑）の再話を紹介したい。(注3)

１．「塵の中の神（Theivam Puluthiyil ／ Divinity in the Dust）」

レックス・ジョセフは、福音書に記されたイエス物語の「原ストーリー」を共通歴１世紀のパレスチナの社会状況を踏まえながら、内戦スリランカのそれと重ね合わせる中で「再話」を執筆した。そうすることで、イエス物語のリアリティに肉薄しようとした。筆者はかつてこう書いた。「暴力が報復という次の暴力を呼び、さらに報復が無限に連鎖する内戦状況のガリラヤに生きたイエスの物語と、同じく内戦時代を生きる者として自ら体験し見聞きした物語とが合わさって、あたかもホログラムのように立体映像が浮かび上がる。そして、（現代スリランカの）話者と聴衆が同じ経験を分かち合うがゆえに、そのホログラムには聴き手の姿も重なって、まさに多重映像となる。」(注4) この認識は、以下の「塵の中の神」を訳出して強まる一方である。

短期大学部幼児教育学科

塵の中の神(注5)

爆弾が破裂した辺りには大きな叫び声が響いていた。町の中心部に向かう混雑した道に、痛みを訴える叫びと爆破の成功に歓喜する声が交錯して聞こえてきた。いつも通り、あの山には大勢が集まっていた。墓地の横を通り過ぎる者のだれもが死からの守りを祈るように、その山を通る者たちも急いで祈った。このようなことが自分の身には起こらないようにと。だがあの日、大群衆の目を引きつけたのは、あの山だった。

「王に歯向かう言辞を弄する者は刑罰を受ける。だが、愛について語る者もまた罰を受ける始末だ。どうしたことか？　革命的な行動は刑罰を受ける。では、奇跡を起すことは罰に価するのか？」二人の女性がこの言葉に思いを巡らした。頭上に打ち付けられた板に三つの言語で書かれた声明を読む者は、同じように思い巡らした。「何という不正義か？　この男は一日たりともそのような大口を叩いたことはない。何という嘘が書き付けられているのか？　この国の司法制度は死に絶えたか？」兵士たちが近づいてきたのを見て、彼らは黙った。

立っていた何人かは自分たちがしたことに満足げであった。火が放たれた家から値打ちのものを持ちだすように、兵士らはその者の持物を分け合った。体温が上昇し、舌は焼け付くように乾き、飢えのために胃は燃えるようだった。・・・やがて、その男から小さな声が発せられた。傍らに立っていた老人が低い声でこう言った。「奴はこう言っておる。自分をこのような苦しみに遭わせた者に対する怒りはない。彼らを許す、とな。」

30年4月15日の金曜日、イエスは十字架に架けられた。もだえる虫のように苦しまれた。ゲッセマネの園での逮捕に始まり二日半にわたった物理的暴力による肉体的苦痛と、５回に及ぶ尋問による精神的苦痛のゆえに。律法は、容疑者が死刑を言い渡される可能性がある場合には、少なくとも２回は尋問しなければならないと定めている。それゆえに、イエスは火曜日の深夜、サンヒドリンから尋問され、証人の証言によって水曜日には牢獄に繋がれた。木曜日、彼は総督ピラトの尋問を受け、その後ヘロデ王の尋問も受けた。その日、彼は兵士によっていばらの冠をかぶせられ、嘲られた。金曜日、イエスは十字架刑に処せられ、バラバは釈放された。イエスが実際に十字架の上にぶらさげられたのは、金曜日の正午（ママ）であった。非人道的なローマ法によって、イエスは着衣を奪われた上で架けられた。今、彼は打ち付けられた釘やいばらの傷による高熱に囚われている。イエスは限界まで痛み苦しんでいたが、それを表すことができなかった。というのも、ほとんど死にかけた状態でぶらさげられたからである。風が吹きすさび、傷に塵埃をこすり付けた。そのことが彼の痛みと苦しみを倍加させた。イエスはぶら下げられ、その顔とからだは埃まみれであった。

これがアブラハムの神なのか？　われわれは救いの名の下に捨てられたのだ！　神はエジプトとバビロンからの解放、そしてマカベア戦争の勝利で満足してしまい、不正にもわれわれを見捨てたのだ。十字架にぶらさげられていた別の男の口から次の言葉が発せられた。「あの人を見ろ。もしこれが愛と非暴力を説いた者が直面する状況だとすれば、俺たちに臨む苦しみはどれだけひどいことになるか？」半ば死んだような状態ではあったが、このやり取りを聞いたのであろう。「友よ、恐れるな。今日、われわれは父なる神のみ前に共にいるであろう」とイエスは言った。

突然、下からの叫び声がイエスを震わせた。骨を突き抜けて打ち付けられた釘が痛みを激しくさせた。「母さん、愛しの母さん。」イエスは心の中で静かにつぶやいた。「母さん、愛しの母さん。」余りもの苦しみにからだをよじらせ、意識を失った。そのとき、幼い時に聞き覚えたあの子守唄が思い出された。

イエスは痛みを忘れ、十字架の上で眠った。12歳のとき、迷子になった時に抱きしめてもらった、あの抱擁。悪霊やベルゼブルの手下に取り囲まれ軽蔑された時に助けてもらった、その助けが心の中で鮮やかによみがえった。「母さん、あなたは祝福された方です。ご自身が神の国を求められたように、みこころに従うことを教えてくださった教師です。」このことがさらにイエスを揺さぶった。それ以上母親の叫び声を聞くことができず、イエスは傍らに立っていた弟子を呼び、こう言った。「母さん、この者が母さんの面倒を見ます。友よ、母さんのことを実の息子のようになって頼む。」さらに続けた。「母さんは神の民のお手本だよ。」

イエスは釘打ちからくる全身を貫く痛みに大声を上げようとしたが、実際には声にならなかった。「神は決してお見捨てになったのではない。聖霊がわたしの上にある。わたしは預言者イザヤが宣明した苦難のしもべなのだ。」イエスのか細い声がそのように言った。彼は愛読の詩編22編の言葉で祈り始めた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。（わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。）」彼の肉体はそれ以上祈りを続けることができなかった。突然、ローマ兵が跳び上がり、「奇跡が起こるぞ」と叫んだ。ときが近づいたことを悟った彼らは、イエスの渇きをいやそうと、棒の先に付けた海綿に飲みものを浸み込ませて差し出した。別の兵士が言った。「止めろ、エリヤを呼んでいるのだ。エリヤが降りてきて奴を救うかどうか見てやろう。」少したってから、彼もイエスの口先に飲みものを差し出した。苦しみの杯を飲み干すためなのか、イエスは苦しみを柔げるための飲みものは受けようとはしなかった。けれども、善意に応えて口だけは付けた。

「おお神よ、感謝いたします。感謝します。常にわたしと共にあったあなたのみ恵みと御愛に感謝いたしま

表１：「十字架上の７つの言葉」

	章　　節	イエスの言葉
1	ルカによる福音書23：34	父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているのか知らないのです。
2	ルカによる福音書23：43	はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる。
3	ヨハネによる福音書19：26 ～ 27	婦人よ、御覧なさい。あなたの子です。見なさい。あなたの母です。
4	マタイによる福音書27：46およびマルコ並行	わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。
5	ヨハネによる福音書19：28	渇く。
6	ヨハネによる福音書19：30	成し遂げられた。
7	ルカによる福音書23：46	父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。

す。わたしはあなたのみ業を行い、あなたのみこころを成し遂げました。あなたの聖なるみ名が永遠に称えられますように。地上にあなたのみ国がすぐさま来ますように。終わった。見よ、わたしはあなたのみ下にまいります。おお主よ、わたしをお受けください。」イエスの頭はがくんとなった。この騒動は何事か？　真理と善にはもはや占める場所がないと、空は泣き叫んでいるのか？真実と正義には場所はないと、激しく吹きすさぶ風が絶叫しているのか？

わが友よ、兄弟よ、弟子たち、女弟子よ！　わたしのからだを墓に残してどこへ急ぐのか？　過ぎ越しの祭りを汚したくないが故に急ぐのか？　急げ、急いで行け！それでもあなたがたを愛する。世界の終りまで共にいる。貧しくされた人々、夫を失った女たち、親を失った子ども、抑圧され周縁に置かれた人々と共にいる。真理と正義、愛と平和、そして道徳的な生活をこの地上に打ち立てようと懸命に働く人々と、いつまでも共にいるであろう。この霊的なことばを人々はどのように聞いたであろうか？…

２．福音書物語の再話としての「塵の中の神」

１）第一場面

「再話」は、エルサレムの丘での爆弾テロ事件の描写から始まる。スリランカにおける少数民族タミル人であるジョセフにとって、イスラエルのパレスチナ占領および攻撃、パレスチナ武装勢力による爆弾テロは他人事ではなかった。この再話が出版された1996年は、イスラエル／パレスチナ情勢の転機となった年である。1996年3月3、4日、エルサレムで自爆攻撃があり、32名が死亡。さらに9月、選出されたばかりのネタニヤフ首相とエルサレムのオルメルト市長が「嘆きの壁」のトンネルに出口を開くことを決定。そのことに反発したパレスチナ人による暴動が起こり、十数人のイスラエル人と百人以上のパレスチナ人が死亡した。そうした一連の爆破事件を物語に反映させることで、ジョセフは自国スリランカの内戦状況へと読者を引き入れる。

実際、これと同じ時期の1995年～96年に起きた、スリランカの「爆破事件」の幾つかを列挙しておく。1995年8月7日、コロンボ中心部で爆弾テロが発生、死者21名。10月20日、コロンボの石油タンク爆破、戦闘で20名以上が死亡、住民数千人が避難。11月11日、コロンボで爆弾テロ、死者20名。1996年1月31日、コロンボの中央銀行が自爆テロにて爆破、死者91名、負傷者1500名、邦人6名負傷。7月24日、コロンボ（デヒワラ）で列車爆破事件、死者70名、負傷者600名。これらのいずれもが、タミル人武装勢力「タミル・イーラム解放のトラ（LTTE）」によるものと考えられている。(注6)

２）「十字架上の７つの言葉」

イエスの「受難物語」を再話する際、ジョセフは福音書が記すイエスの発話を自由にパラフレーズし、共観福音書が出来事を解釈したときに予型とした詩編22編を念頭に構成したと考えられる。そこで、「再話」におけるイエスの発話について先ず検討し、次に詩編22編の引用およびその展開について考えたい。

４福音書を総合すれば、イエスは十字架刑に処せられたとき、７つの言葉を発したと記されている。いわゆる「十字架上の７つの言葉」(注7)である。それを作表すれば、上のようになる。（表１）

ジョセフによる再話がこれら「十字架上の７つの言葉」のパラフレーズであることは明らかである。先ず、「7つの言葉」の第１については、イエスには直接語らせず、傍観者に次のように告げさせる。「自分をこのような苦しみに遭わせた者に対する怒りはない。彼らを許す」と。次に、イエスと共に十字架に架けられた二人の「犯罪人」とのやり取りについてである。その内の一人に対して再話のイエスは「友よ、恐れるな。今日、われわれは父なる神のみ前に共にいるであろう」と語りかけており、福音書の「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」（ルカ23：43）と対応している。

次に、ヨハネが記したイエスと母マリアとのやり取りについては、「母さん、この者が母さんの面倒を見ます。友よ、母さんのことを実の息子のようになって頼む」と、言い換えている。さらに再話のイエスは、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ（わが神、わが神、なぜわた

表２：受難物語と詩編22編の関係

詩編22編の句	福音書の記事
わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか。(2節)	わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。(マルコ15：34)
わたしを見る人は皆、わたしを嘲笑い、唇を突き出し、頭を振る。(8節)	そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。・・・(マルコ15：29)
主に頼んで救ってもらうがよい。(9節)	神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。(マタイ27：43)
わたしは水となって注ぎ出され、骨はことごとくはずれ、心は胸の中で蝋のように溶ける。(15節)	兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出た。(ヨハネ19：34)
口は渇いて素焼きのかけらとなり、舌は上顎にはり付く。(16節)	イエスは・・「渇く」と言われた。(ヨハネ19：28)
骨が数えられる程になったわたしのからだを、彼らはさらしものにして眺め、わたしの着物を分け、衣を取ろうとしてくじを引く。(18～19節)	それから、兵士たちはイエスを十字架につけて、その服を分け合った、だれが何を取るかをくじ引きで決めてから。(マルコ15：24)

しをお見捨てになったのですか)」と祈る。マルコ福音書はそのように絶望的に叫んだとする(マルコ15：33)が、ジョセフはイエスが「苦難のしもべ」(イザヤ書53章)としての自己理解を最後の場面に至って得たと解釈する。すなわち、「釘打ちから来る全身を貫く痛みに大声を上げようとしたが、実際には声にならなかった。『神は決してお見捨てになったのではない。聖霊はわたしの上にある。わたしは預言者イザヤが宣明した苦難のしもべなのだ』」と、ジョセフは自らの解釈をイエスの口に上らせるのである。

続いて、ヨハネが記した「渇く」については、ジョセフは再話の最初のところで、この後検討する詩編22：16を引きつつ、「舌は焼け付くように渇き、飢えのために胃は焼けるようだった」と暗示的に表現することで済ませている。

最後に、ヨハネの「成し遂げられた」とルカの「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」を増補して、ジョセフは一連の長台詞を構成し、「わたしはあなたのみ業を行い、あなたのみこころを成し遂げました。・・・終わった。見よ、わたしはあなたのみ下にまいります。おお主よ、わたしをお受けください」とされている。その際、ヨハネ19:30のギリシア語「　　」を「成し遂げた」「終わった」と二通りの翻訳で繰り返している。ＫＪＶやＲＳＶなど英語聖書の多くは「it is finished」としているが、「それは終了したとか済んだという意味で終わったというのではなく、完成したという意味である」(注8)ことは、多くの注解者が指摘しているところである。それを意識してか、ジョセフは二通りに語らせている。

以上のようにジョセフは、「十字架上の７つの言葉」すべてを、引用するかパラフレーズするかして再話のイエスに語らせる。その意味では、再話といえども原ストーリーに忠実である。

３）詩編22編との関連

周知の通り、師であるイエスを十字架刑で失った弟子たちは、その出来事をどのように解釈すればよいか、途方にくれた。彼(女)たちは、イエスが復活したとの信仰を得たのだが、それでも十字架はつまずきとなった。なぜなら、「ある人が死刑に当たる罪を犯して処刑され、あなたがその人を木にかけるならば、・・・木にかけられた死体は、神に呪われたもの」(申命記21：22～23)というユダヤ教の伝統に従えば、十字架上で刑死するということは、神によって呪われた者となることだからである。弟子たちにとって、師であるイエスが宗教的に「呪われた」存在となることは受け入れがたいことであったろう。

それを突破したのが、ヘブライ語聖書(「律法」「預言」「詩編」)にある「メシア預言」であった。ユダヤ人である弟子たちは、預言書と詩篇にある「苦難のしもべ」としてのメシア像にイエスの姿を見た。とりわけ、イエスの受難の解釈上、大きな影響を与えたのがイザヤ書53章である。その他、イエスの裁判と十字架刑の描写に色濃く反映しているのが、詩編22編である。この詩は類型としては「個人の嘆きの詩」の代表作とされ、「受難の詩」と呼ばれるものである。福音書記者はこの詩編の「嘆きの歌」をイザヤ書同様、「メシア預言」と理解したのである。

そこで、詩編22編と受難物語の関係を表示すると上のようになる。(表２)(注9)

以上のように、福音書における受難物語と詩編22編の関係は明らかである。ジョセフも福音書物語と詩編22編を並べて置いて、彼の「再話」を執筆したと考えられる。実際、再話において詩編22編が反映しているところは多い。「兵士たちはその者の持物を分け合った」「舌は焼け付くように渇いた」「イエスはもだえる虫のよ

うに苦しまれた」「風が吹きすさび、彼の傷に塵埃をこすり付けた。・・・その顔とからだは埃まみれであった」「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」「エリヤが降りてきて奴を救うかどうか見てやろう」である。

けれども、ジョセフによる詩編22編の引用／パラフレーズのうち、福音書が直接記していない句がある。それは、「イエスはもだえる虫のように苦しまれた」と「風が吹きすさび、彼の傷に塵埃をこすり付けた。・・・その顔とからだは埃まみれであった」である。詩編22編にはこうある。「わたしは虫けら、とても人とはいえない。人間の屑、民の恥。」（7節）「あなたはわたしを塵と死の中に打ち捨てられる。」（16節）

４）「塵の中の神」

この二つの句をジョセフは見逃さなかった。イエスは人間とは言えない、虫なのだ。人間の屑、民の恥として塵の中に捨てられたと理解した。福音書の文献学的研究においては、詩編22：16の「塵」を受難物語に直接関連付けることにはあまり関心がないようである。それよりも、次節17節について、『新共同訳聖書』が「手足を砕く」と訳した句は、KJV、RSVなど多くの英語聖書のように「They pierced my hands and my feet（手足を釘付けにする）」と翻訳することが可能かに向けられている。もし「釘付けにする」という意味であれば、この句は十字架刑での釘打ちを預言したものと解釈されるからである。(注10)

一方、受難物語をめぐる黙想や説教においては、イエスの姿を「塵」と結び付けて捉える者は多い。たとえば、フランスのピエール・マリー神父のエッセイには次のようにあるとのことである。「彼は自ら深い悲しみと苦悩に沈み、魂は錯乱した。絶望のどん底まで落ち込み、生ける水の源からはるかに遠ざかり、自ら父に見捨てられた者となり、釘づけになった十字架上で叫ばれた、『渇く』と。彼は塵の中に、死の陰に、死んで横たえられた。」(注11)

しかしながら、マリーの一文はイエスの十字架死の象徴表現である。イエスの死を「塵の中に」「死の陰」に「横たえられた」ものとして、あくまでも象徴的に述べるのである。あるいは、福音書の記述に従って、イエスがアリマタヤのヨセフによって十字架から引き下ろされたとき、一旦、地面に横たえられた。そのことを「塵の中で･･･横たえられた」と表したのかも知れない。しかし、ジョセフは「塵と死の中に打ち捨てられる」（詩編22：16）をイエスの受難の実相を表すものとして解釈し、再話の中に刻んだ。「風が吹きすさび、傷に塵埃をこすり付けた。そのことが彼の痛みと苦しみを倍加させた。イエスはぶら下げられ、その顔とからだは埃まみれであった」と。

受難物語をめぐるキリスト教言説においては、イエスの十字架刑死がいかに残虐なものであったか、詳述してきた。そのような伝統を持ちながら、たとえばキリスト教美術における受難画の多くではイエスの顔肌は綺麗なままである。汗と血が滴る様を描いたとしても、肌はまるで舞台化粧を施したように美しいままである。(注12) イエスの苦難の描写で有名なマティアス・グリューネヴァルト（1470/75年頃～1528年）の「受難（Passion）」（イーゼンハイム祭壇画）でさえ、イエスの顔は泥まみれとまではいかない。しかし、ジョセフはイエスの肌、いや全身が埃まみれ、泥だらけであったと記す。これは彼がただ机上で、福音書の記述を超える形で、受難物語と詩編22編を丁寧に合わせていった結果なのではない。そこには、現代スリランカの内戦状況に苦しむタミル人の現実の顔が投影されているのである。

スリランカ中央部の要所ハバラナ・ジャンクションにコロンボやキャンディから入って過ぎると、その先は、北に向かうにせよ東に向かうにせよ、ドライ・ゾーンである。(注13) スリランカ内戦の主戦場となったのは北東部であった。そこは、海岸部には潟湖が広がっているものの、海から少し離れると最早ドライ・ゾーンである。乾季では風が起こると、容易に塵埃が巻き上げられ、木々や人の全身に吹き付ける。(注14) したがって、戸外で働く農民や労働者の顔は汗と埃まみれとなる。そればかりではない。内戦時、北東部で繰り広げられた戦闘において、兵士らは政府軍、LTTEの別を問わず、みな埃まみれ、泥だらけになって戦った。新聞報道のみならず、インターネットで配信された戦闘の埃立つ様子と、戦場に倒れた兵士の泥まみれの姿は、ジョセフの再話に確実に反映されているのだろう。東部諸市で平和運動に従事していたジョセフは、そのような光景を誰よりも熟知していたのである。まさに、「塵と死の中に打ち捨てられた」（詩編22：16）若者たちの姿が、十字架上で汗と血と埃まみれになっているイエスと重なるのである。

キリスト教の基本的神学概念に「受肉（incarnation）」がある。すなわち、「万物に先立って父なる神のもとに存在した神の独り子が人間になって地上に現れたことによって、救いが出来事となったという考え方」(注15)である。「神の子」イエスが人間となった。そうであれば、イエスは肉体を持つ存在である。肉体を持つがゆえに、加えられた物理的暴力には痛みと苦しみを感じる。福音書記者はこの受肉したイエスに加えられた暴虐を、詩編22編の表記を通して描き出した。そして、その描写はイエスの受難の実相をかなりの程度、映し出すものであった。ジョセフはさらに、詩編22：16の「塵と死の中に打ち捨てられる」を通して、イエスの受難とスリランカ内戦の現実を重ね合わせて表現した。そういう意味で、十字架の刑死の実相をこれほど映し出したものはないと言えるほどに、「塵」はイエスの受肉を最大限に表現したものではないだろうか。

そして、スリランカ内戦の犠牲者の顔にこびりついた「塵」と、十字架上で吹きすさぶ風にこすりつけられた

「塵」が人間に課せられた最大級の苦難という意味で等質なのであれば、ここには「共苦」の主題が起ちあがる。それは、イエスの苦しみに人の側が近づくという意味での「共苦」ではなく、イエスがあらゆる人間の苦難にご自身を同一化させられたという意味でのそれである。マタイによれば、イエスは「インマヌエル(神は我々と共におられる)」(マタイ福音書1：23)という名を持つ方であった。本当に「我々と共におられる」と言うのであれば、この地の塵と埃にまみれた苦難の底にその者はいなければならない。そして、イエスはその「共苦」を果たしたのである。

ジョセフが内戦下スリランカの少数民族タミル人キリスト者としてここで試みた再話は、U．ルツが彼のマタイ福音書註解の影響史を扱った部分において、十字架刑を描いた絵画の、それも近代のものを取り上げて述べたことに合致するであろう。すなわち、イエスの十字架刑を事柄に即して現実化して描写しようとするなら、それは「第一に、イエスの歴史を含まねばならない。つまり、当時を、つまり、間違いようもなくまた全く特別なナザレのイエスの生涯と苦難を。第二に、それは現在を含まねばならない。つまり、今日苦難する人々の、コンテキストに即した経験と希望を。第三に、それは死を含まねばならない、その死は常に人間全体の死であり、どんな人間でも持ち堪えることのできない死、・・である。そして最後に、・・生ける神を、ただ単に個々の人間の神であるだけでなく全世界の神を、それと共にイースター的勝利の観点を、含まねばならない」(注16)と述べたことに。

おわりに

最後に今後の課題について記して終わりたい。先ず、本ノートでは詳細に検討できなかった詩編22編と「受難物語」の関係についてのさらなる釈義的研究が課題として残されている。(注17)

次に、ジョセフは、イエスの発話を「十字架上の7つの言葉」に限らず、拡大する形で創作している。彼が福音書物語に書き加えた台詞で目につくのは、母マリアに対する言葉である。「母さん、あなたは祝福された方です。ご自身が神の国を求められたように、神のみこころに従うことを教えてくださった教師です。」「母さんは神の民のお手本だよ。」これらマリアに向けたイエスの言葉をなぜジョセフが加えたのかについては、ジョセフ自身の母親との関係を含めた個人史のさらなる検討が必要である。

それから、これが最大の課題となると思うが、イエスの自己意識の問題がある。すなわち、ジョセフは十字架上のイエスに「神は決してお見捨てになったのではない。聖霊がわたしの上にある。わたしは預言者イザヤが宣明した苦難のしもべなのだ」との自己理解、メシア意識を語らせているが、これはイエスをどう理解するかに関する大問題である。しかも、ジョセフのイエスは「神は決してお見捨てになったのではない」と言いつつ、その直後に「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と祈っている。一見、イエスは自己矛盾をきたしているようだが、ジョセフには一つの意図があったと見たい。

近年の聖書解釈学は、生前の歴史のイエスには「メシア」としての明白な自己理解はなかったとするのが大勢である。ジョセフもそのことは十分に理解していたはずである。しかし、彼はイエスに「苦難のしもべ」としての自己意識を語らせた。ただ絶叫して死んだのではないとした。そのことの意義をさらに検討しなければならない。

『Theivam Puluthiyil (塵の中の神)』にはまだ読解を進めていない再話12篇がある。これらの翻訳と解釈をさらに進めたい。つまり筆者は、今しばらくはジョセフの再話に耳を傾けたいと考えているのである。(注18)

脚　注

(1) 志村真『平和をめざす共生神学　スリランカの「対話と解放の神学」に学ぶ』新教出版社、2008年、5－7頁。

(2) Joseph, Rex M. P., *Theivam Puluthiyil (Divinity in the Divinity)* (Kandy: Zindy Enterprises, 1996)

(3) これら再話13篇の内4篇は既に、著者自身の英訳が発表されており、報告者はそれに解説を付して邦訳出版している。(レックス・ジョセフ、志村真「イエス物語を再話する　スリランカの内戦状況において」志村真、前掲書、18－52頁。)

今回、未邦訳の再話9篇の英訳をA．M．ジョセフ女史とクリストフ・バルラージ講師(ランカ神学大学)に依頼し、英訳原稿を得ることができた。両氏に深く感謝したい。

(4) 志村真、前掲書、30頁。

(5) Joseph , Rex M. P., *Theivam Puluthiyil*, pp. 63-69.

(6) スリランカ内戦については幾つかの文献があるが、ここでは　反差別国際運動アジア委員会、反差別国際運動日本委員会編『スリランカの内戦と人権』解放出版社、2008年を挙げておく。

その後、ジョセフ自身が1998年1月に身近で体験した、キャンディの仏歯寺の爆破事件の報告は、Joseph, Rex M. P., "Flame Amidst Storms-World Religions Vis-à-vis Violence: A Sri Lankan Perspective," *Theological Perspectives on Violence and Non-violence* (Geneva: WCC., 1998), pp. 73-96. を見よ。

(7) ４福音書すべてが十字架上でのイエスの発話を記している。これらの内、マタイはマルコに依拠しているものの、同じ共観福音書のルカは自らの「特殊資料」を用いており、ヨハネも同様である。

(8) スローヤン、G. S.『ヨハネによる福音書』鈴木脩平訳、日本基督教団出版局、1992年、372頁。

(9) 月本昭男『詩篇の思想と信仰Ⅰ』新教出版社、2003年、313頁参照。

(10) たとえば、関根正雄は「わが手と足をさし貫いた」(『新訳旧約聖書　第Ⅳ巻　諸書』教文館、1995年、1331頁) としており、『新共同訳』とは異なる見解を示している。

　詩編22編と受難物語の関連については、「骨はことごとくはずれ(る)」(詩編22・15) の理解を加えなければならないだろう。ローマ時代の十字架刑において、受刑者の肩関節、あるいはその他の関節の脱臼が起こったことは多くの者が指摘しているが、手への「釘打ち」をどの部位に行ったかに左右される。また、釘打ちと縄による固定のどちらであったか、あるいはその併用であったかによっても左右される。しかし、マルティン・ヘンゲルやＪ．Ｄ．クロッサンらに従って、イエスは処刑後も埋葬されず野ざらしにされ、その死体は野獣に喰われるか朽ちるがまま放置されたと歴史学的に解するならば、イエスの骨は当然「ことごとくはずれ」てしまったことであろう。(ヘンゲル、マルティン『十字架　その歴史的探求』土岐正策、土岐健治訳、ヨルダン社、1983年。クロッサン、ジョン・ドミニク『誰がイエスを殺したのか　反ユダヤ主義の起源とイエスの死』松田和也訳、青土社、2001年。)

(11) Marie, Pierre, “Les fils prdodigues et le fils prodigue,” *Sources Vives 13* (Communion de Jerusalem, Paris, March 1987), 87-93. ナウエン・ヘンリ『放蕩息子の帰郷』片岡信光訳、あめんどう、2003年、79頁より引用。

(12) カール・バルトはかつてこう説いた。「十字架にかけられた方は、古代においても、近代においてもさまざまな画家によって美しく描かれている。・・・しかし、それらの絵画のほとんどは偽りである。十字架にかけられた方の光景は、美しいものではなく、われわれを突き放し、恐怖を呼び起こすものである。」(『カール・バルト説教選集 ３』大崎節郎ほか訳、日本基督教団出版局、1995年、377頁。)

(13) スリランカ北東部は、年に一期、「北東モンスーン期」(11月～３月) に500 ～ 800ミリの降雨を得る。一方、南西部では「南西モンスーン期」(５月～９月) にもう一度雨季を得る。「そのため、年間降水量に地域的差が大きく現れ、島の北部、東部、東南部を乾燥地帯(ドライ・ゾーン)、南西部を湿潤地帯(ウェット・ゾーン) と呼んで区別している。」(杉本良男編『もっと知りたいスリランカ』弘文堂、1987年、７－８頁。)

(14) 筆者はスリランカ北部を訪れる機会をまだ得ていないが、東部には1993年11月以降、６回訪問しているので、乾季に巻き上がる砂埃は体験ずみである。

(15) 大貫隆ほか編『岩波 キリスト教辞典』岩波書店、2002年、548頁。

(16) ルツ、ウルリヒ『マタイによる福音書 (26 ～ 28章) EKK新約聖書註解Ⅰ/4』小河陽訳、教文館、2009年、431－432頁。

(17) ノートを概ね書き終わったところで、詩編22編と受難物語の関係を論じたモノグラフを入手した。Carey, Holly J., *Jesus' cry from the cross, Towards a first-century understanding of the intertextual relationship between Psalm 22 and the narrative of Mark's gospel* (London : T & T Clark, 2009) である。近刊と聞いている Hoffman, Mark G. Vitalis, *Psalm 22 and the Crucifixion of Jesus* (London: T&T Clark, 2010) などと併せて今後、検討したい。

(18) 聖書の引用はすべて『新共同訳聖書』(日本聖書協会) によった。